

初対面の3人会話における文体シフトの効果 —「ディスコース・ポライトネス」の観点から—

大塚 容子

Effects of Speech Style Shift in Conversation among Three Persons: From the Perspective of “Discourse Politeness”

Yoko OTSUKA

Abstract

The purpose of this study is to examine which speech style is used in the first-encounter conversation among three males, and to analyze what kinds of effect the speech style shift has on the conversation, if the speech style shifts occur.

The polite form is mainly used in the conversation and the speech style shifts from the polite style to the non-polite style only sometimes. The shifts have a positive politeness effect and a linguistic discourse effect.

Key words

polite form, non-polite form, speech style shift, discourse politeness

はじめに

日本語には丁寧体（デス・マス体）と普通体（ダ・デアル体）という2種類の文体がある。日本語を外国語として学ぶ学習者にとって当該の会話のなかで丁寧体を使用するか普通体を使用するか、丁寧体と普通体をどのように使い分けるかは非常に難しい言語事象の一つである。一人の話者の丁寧体から普通体への移行、あるいは普通体から丁寧体への移行を文体シフトと呼ぶことにする。テレビ討論番組における文体を調査した大塚（2004）は、公的な場面であると考えられる討論番組において出演者によって使用する文体に違いが見られること、司会者は出演者から本音を引き出すために普通体を多用することを指摘した。出演者による文体の使用の違いはお互いの年齢差、社会的地位の上下関係を反映するものであった。

初対面会話では文体に関して日本語母語話者はどのような言語行動をとるのであろうか。どのような文体が使用されるのか、文体シフトが見られるのか、見られるとすればそれはどのような効果を生み出しているのだろうか。本稿では男性大学院生3名による初対面会話における文体シフトについて考察する。まず、Brown and Levinson（1987）によるポライトネス理論、宇佐美（2001）のディスコース・ポライトネス理論について説明する。次に調査方法について述べ、調査結果を報告する。最後にディスコース・ポライトネス理論の観点から考察する。

1. ポライトネス

1.1. Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論

Brown and Levinson (1987) は「フェイス」(face) という概念を使ってポライトネス理論を展開した。ここでいう「フェイス」とは、人間一人ひとりが主張したい社会的な自己イメージのことで、「ポジティブ・フェイス」(positive face) と「ネガティブ・フェイス」(negative face) という二つの側面がある。ポジティブ・フェイスとは「(何らかの点で) 認められたいという欲求」(ブラウン、ペネロピ・レヴィンソン、スティーヴン C. (2011: 17))、ネガティブ・フェイスとは「自らの行為を妨げられたくないという欲求」(ブラウン、ペネロピ・レヴィンソン、スティーヴン C. (2011: 17)) のことである。人間が社会生活を営むうえでこれらのフェイスを傷つける可能性は常につきまとう。このフェイスを侵害する可能性のある行動を「フェイス威嚇行動」(Face-Threatening Act、以下 FTA と略記) と呼ぶ。そして、FTA の大きさによって FTA を行うか否か、行う場合どのようなストラテジーを採るかが決まる。FTA が非常に大きい場合は FTA そのものを行わない。FTA が小さい場合は FTA を行うが、「はっきりことばに出して言う」場合と「はっきりことばにしないで暗示的に言う」場合とがある。さらに「はっきりことばに出して言う」場合には「緩和表現を伴わずそのまま言う」場合と緩和表現を伴う場合とがある。後者の場合には「ポジティブ・ポライトネス」(positive politeness) と「ネガティブ・ポライトネス」(negative politeness) とがある。ポジティブ・ポライトネスとはポジティブ・フェイスに配慮した FTA の緩和で、その方策をポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと呼ぶ。ネガティブ・ポライトネスとはネガティブ・フェイスに配慮した FTA の緩和で、その方策をネガティブ・ポライトネス・ストラテジーと呼ぶ。これらが FTA の対処方法である。

1.2. 宇佐美 (2001) のディスコース・ポライトネス理論

宇佐美 (2001) は Brown and Levinson (1987) の理論を踏まえ、ディスコース全体を射程に入れたディスコース・ポライトネス理論を展開した。これはある談話のディスコース・ポライトネスの基本状態を同定した上で、そこから逸脱した行動を有標行動と呼び、有標行動の結果としてプラス・ポライトネス効果、マイナス・ポライトネス効果、言語的談話効果が生まれるというものである。スピーチ・レベルを例に挙げると、ある談話の丁寧体の使用率が50%を超えていれば、丁寧体はその談話の無標ポライトネスとしての「ディスコース・ポライトネス」の基本状態になる。丁寧体を使用することは決してポライトなのではなく、会話参加者の人間関係、会話の状況等から当然のこととして期待されていることを意味する。そして基本状態である丁寧体から逸脱すること、つまり普通体を使用することが有標行動となる。有標行動の結果として生まれるプラス・ポライトネス効果、マイナス・ポライトネス効果は有標ポライトネスである。プラス・ポライトネス効果は相手の「フェイス」を守ることになり、マイナス・ポライトネス効果は相手の「フェイス」を傷つけることになる。言語的談話効果は、話題の転換等に関わるもので、無標ポライトネスである。これがディスコース・ポライトネス理論の大枠である。

2. 調査

2.1. 調査資料⁽³⁾

本稿で使用するデータは約30分間の男性3人による初対面会話と会話終了後に行ったフォロー

アップ・インタビューである。会話参加者（J13、J14、J15）は同一の大学院の学生で、奈良について何でもよいので話してほしいと指示をした。会話はビデオに録画すると同時にICレコーダーに録音した。会話終了後、一人ずつ約10分程度のフォローアップ・インタビューを行い、ICレコーダーに録音した。フォローアップ・インタビューを行うにあたり、簡単なアンケート調査を行った。アンケート調査の内容は、会話はうまくできたかどうか、会話は楽しかったかどうか、相手に好感がもてたかどうか、の3点で、それぞれに「はい」「いいえ」のいずれかで答えるものである。

2.2. 調査手順

会話は宇佐美（2011）に基づき、発話文を単位として文字化した。そして大塚（2004）に倣い、各発話文を文体の違いを標示する文（標識あり文）と、標示しない文（標識なし文）とに分類し、さらに標識あり文を丁寧体文と普通体文とに分けた。標識なし文とは、(1)に示すように、丁寧体であるか普通体であるかを標示しない文のことで、多くは中途発話文である。

(1) 標識なし文

- a. まあ、大阪に住んでも、やっぱり最短ルートってどれだろうって思ったり。
- b. あのピンク色の玉がばーってついてたりして。
- c. もう、どこに何あるんやってというのが、うん。

次に、宇佐美（2012）を使い、発話文ごとに丁寧体文をP、普通体文をN、標識なし文をNMとコーディングした。

3. 結果

3.1. フォローアップ・インタビュー

三つのアンケート調査項目について3人の会話参加者は全員「はい」と答えた。年齢について質問すると、J13は「J14については2～5歳上で、J15については年下だと思った。」と答えた。J14とJ15は「年齢に対する意識はなかった。」と答えた。会話における丁寧体使用について質問すると、J13は「よほど仲良くない限り年齢に関係なく敬語を使う。仕事をしていた（入学前に仕事をしていた）経験上そうする。」と答えた。J14は「初対面だから使った。」と答え、J15は「敬語を使うのは癖。」と答えた。

各会話参加者は文体に関して、初対面という状況では年齢に関係なく丁寧体を使用することが当然であると考えていることがわかる。

3.2. ディスコース・ポライトネス

各会話参加者の本調査会話における発話文数を示したのが表1である。

表1 各会話参加者の発話文数

会話参加者	頻度	割合
J13	172	22.90%
J14	240	31.96%
J15	339	45.14%
合計	751	100.00%

J15の発話文数が最も多くなっている。

丁寧体文、普通体文、標識なし文の頻度と、会話参加者ごとの総計に占める各項目の割合は表2のとおりである。

表2 各項目の頻度と、会話参加者ごとの項目の総計に占める割合

会話参加者	丁寧体文		普通体文		標識なし文		合計	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J13	103	59.88%	11	6.40%	58	33.72%	172	100.00%
J14	125	52.08%	10	4.17%	105	43.75%	240	100.00%
J15	80	23.67%	12	3.55%	246	72.78%	338	100.00%

J13、J14の丁寧体文の使用率は50%を超えている。J15は標識なし文の使用頻度が最も高く、その割合は72.78%に及んでいる。これは大塚（2011）で指摘したように、J15が「発話の断片ごとに」（上田（2008：69））細やかにあいづちを打っていることによるものである。大塚（2011：88）によれば、J15のあいづちターン数の総ターン数に占める割合は68.0%で、J15のターンの半分以上があいづちによるものである。そして、このあいづちの88.7%が「ええ」、「ああ」等の短い表現によるあいづちである。表2の標識なし文のなかにはこの頻繁に打たれたあいづちが含まれている。J13、J14の標識なし文の全体に占める割合が高いのもJ15のあいづち行動の影響である。J15の細やかやあいづちは、(2)に示すようにJ13、J14の中途発話文の後に打たれることが多いからである。

(2) J15のあいづち行動

- ⁽⁶⁾
75 J14 あの、何ていうか、その、普段はどうでもいいと思ってても、やっぱり環境が変わると、それがふと気になったりするっているのは、
→76 J15 ああ。
77 J14 ありますね。
78 J15 ああ、なるほどね。
79 J13 すごくいい空気やし、何だかこう、あの、学校来る途中もたくさん、
→80 J15 ええ。
81 J13 緑があって、
→82 J15 ええ。
83 J13 いい場所だなんて、いつも思ってるんですけど。

J13、J14の発話の途中にJ15があいづちを打っていることがわかる。

ここであいづちの分類をしておく。文体の対立を示すあいづちを「あいづち1」、文体の対立を示さないあいづちを「あいづち2」と呼ぶことにする。「そうですか。」と「そうか。」は文体の対立があるので、「あいづち1」となり、前者を丁寧体、後者を普通体に分類する。あいづち2の具体的表現は、「はい」、「ええ」、「ああ」等の短い表現である。

J15の標識なし文からあいづち2による発話文を除いて丁寧体文、普通体文、標識なし文の総数に占める割合を集計してみると、それぞれ55.56%、8.33%、36.11%となり、丁寧体文の頻度が50%を超える。よって、本初対面会話の「ディスコース・ポライトネス」の基本状態を丁寧体とする。丁寧体基調の会話の一部を以下に示す。

(3) 丁寧体基調

- 565 J13 みんなが仲良くなるというか、そういう場所ってあるんですか？。
- 566 J15 そう、そういう意味では奈良もあれですね。
- 567 J15 あの、あの一、いや、同じところあると思いますよ。
- 568 J15 ええ。
- 569 J13 ああ、そうですか。
- 570 J15 ええ。
- 571 J13 行ってみたいなと思ってるんですけどね、そういうところは。
- 572 J15 ええ。
- 573 J15 こうあまり、その、レストランとかって言われると、何かちょっとあれだと思うんですけどね。
- 574 J15 昔から例えば、経営してる店とか、ええ。
- 575 J15 まあ、ちょっと茶菓子屋さんとかに入ると、
- 576 J13 はいはいはい。
- 577 J15 ありますけどね。
- 578 J15 ええ。
- 579 J13 それに興味があるんです、
- 580 J15 ええ。
- 581 J13 そういうところは。
- 582 J14 僕はあれですね。
- 583 J14 あの、地元にあった古い店って、
- 584 J15 ああ。
- 585 J14 あんまり残ってないんですよ、<その発展> {<|>。
- 586 J15 <ああ> {>|}。
- 587 J13 減りましたね。

J13、J14、J15の全員が丁寧体で会話を進めている。

3.3. 文体シフト

本初対面会話の基本状態は丁寧体であるから、普通体へのシフトがいつ行われ、それがどのような効果を生んでいるかが問題となる。表2が示すように、使用された普通体文の数はJ13、J14、J15を合わせて33である。どのような状況でシフトが行われたかを示すために、普通体文が使

表3

普通体文が使用された直前の発話文の種類	頻度
丁寧体文	13
普通体文	1
標識なし文	6
あいづち2	11
笑い	2
合計	33

用された直前の発話文の種類とその頻度を表3に示す。

丁寧体文が最も多く、次にあいづち2となっている。あいづち2の頻度が高いのは、J15のあいづちによるものであると考えられる。普通体文が使用された直前の発話文が普通体文であるのは1回しかないことから、普通体へのシフトは単発で行われ、一人の会話参加者が普通体へシフトしたことがきっかけで他の会話参加者も普通体を使用することや、一人の会話参加者が連続して普通体を使用することはほとんどなかったことがわかる。

普通体文が連続して使用されたのは次の例のみである。

(4) 普通体文からのシフト

- 491 J15 とりあえず最初にホームで奈良見てて、で、アウェーでどっか行ってから帰ってくると、奈良の良さって分かってくるんちゃうかなと。
 →492 J14 うん、そうなのかな。
 →493 J13 実際、名古屋に行かれて戻って来られた？。
 494 J15 ええ。
 495 J15 思いますね。

J13はJ14の普通体による発話のあと、普通体を使用している。

表4は普通体文を発話した話者とその直前の発話文の話者とは同一人物であるか否かを表したものである。

表4

直前の発話文の話者	頻度
同一の話者	9
異なる話者	24
合計	33

一人の会話参加者の発話内での文体シフトの生起数よりも他の会話参加者の発話に対して生じた文体シフトの生起数のほうが多い。会話参加者間のやりとりのなかで普通体へのシフトが起きている。

3.4. 文体シフトの効果

聞き手としての言語行動と話し手としての言語行動とに分けて提示する。

3.4.1. 聞き手としての言語行動

聞き手としての言語行動とは、あいづちを打つことである。普通体のあいづちを使用したのはJ15が7回、J13とJ14がそれぞれ1回ずつである。J15のあいづち行動を示す。

(5) J15の普通体文によるあいづち行動

- 62 J13 で、空気もものすごい悪いし、あの、こっちだったら、あの、息もしやすいし、ものすごい、あの、いろいろ、体にすごく良さそうだなという感じが、
 63 J15 ああ。
 64 J13 しましたね。
 65 J15 ああ。
 66 J14 やっぱり。

- 67 J14 <全然> |<|。
 68 J13 <全然> |>| 違いましたね。
 69 J13 それは実際にこう、毎日行って帰ってってのを繰り返すことで、やっとね、分かったことなんですけど、はい。
 70 J13 そういふのを感じました。
 →71 J15 そうか。
 72 J14 やっぱり環境が変わると、やっぱり意識してしまうような、ありますね。
 73 J15 ああ。
 74 J13 そうですね。

(5)はJ13が奈良と大阪では空気が違うことを話している場面である。J15はJ13の発話に対し「ああ」というあいづち2を打って発話を促し、J13の丁寧体による発話の終結部(71)で普通体のあいづち1を使用している。J13とJ14の発話はJ15による普通体のあいづちの後も普通体にはシフトしていない。J15の普通体のあいづちのほとんどは連続した発話の終結部に現われ、独話的に打たれたものである。

3.4.2. 話し手としての言語行動

どのような状況で普通体へシフトしているのでしょうか。普通体へのシフトは①情報を追加するとき、②情報を言い換えるとき、③個人的な質問をするとき、④経験がないことを語るとき、⑤感想を述べるとき、⑥冗談を言うとき、に起こっている。以下に例を示す。

(6) 情報の追加

- 217 J14 面白いことに、その、まあ、田んぼが減るじゃないですか。
 218 J13 はい。
 219 J14 すると、その、別の田んぼに住んでた害虫が移り住んでくるんです。
 220 J15 <ああ> |<|。
 221 J13 <はい> |>|。
 222 J14 だから、田んぼが減ってるるところって、すごい害虫が多いんですよ。
 223 J15 ああ。
 →224 J14 あの、連中は、あの、住みやすいところに引っ越ししてくる。
 225 J15 <かすかな笑い>
 226 J14 だから、すごい、あの、困ってますね。
 227 J14 害虫とか、多くて多くて。

(6)は、J14が最近の田んぼの減少と害虫の増加との関係話を話している場面である。田んぼが減るとその田んぼに住んでいた害虫が他の田んぼに移ってくるので、田んぼが減っているところは害虫が多い、だから困っているというのがこの話の概略で、すべて丁寧体で語られている。J13とJ15があいづちを打ちながらJ14の発話を発展させている。J15のあいづち2のあとに、「害虫は住みやすいところに移動する」(224)という情報が付加されている。

(7) 情報の言い換え

- 379 J14 あんま、シカ同士のけんかは、あんまり見ないですね、奈良公園では。
 380 J15 うん。
 381 J14 シカ同士で、その、あんだけ角があるなら、つつき合ってもよさそうなもん。
 382 J13 そうなんです。

→383 J14 意外に、あの、けんかしない。

384 J14 うん。

カラスには学習能力があることを語り、同じ動物の鹿の話に話題が移ったところである。J14は327で奈良公園では鹿同士のけんかはあまり見ないことを語り、381、383でけんかしてもよさそうなのに、けんかしないと述べ、情報の言い換えをしている。381から384までのJ14の発話の間に、J15のあいづち2、J13のあいづち1が打たれている。

話題そのものに対する質問ではなく、その話題に関連する個人的な質問をするとき普通体へのシフトが見られる。(4)と同じ例である。

(8) 個人的な質問

486 J15 で、また奈良の人ってたぶん、奈良を出てって、出てってから、何か奈良の良さが分かるよとこあるんちゃうかな、

487 J14 ああ。

488 J14 そうですね。

489 J15 と思うんですね。

490 J13 うーん。

491 J15 とりあえず最初にホームで奈良見てて、で、アウエーでどっか行ってから帰ってくると、奈良の良さって分かってくるんちゃうかなと。

492 J14 うん、そうなのかな。

→493 J13 実際、名古屋に行かれて戻って来られた？。

494 J15 ええ。

495 J15 思いますね。

奈良に住んでいるときには奈良の良さはわからないが、一回奈良を出てみると奈良の良さがわかるのではないかとJ15が自分の意見を述べている場面である。J14の疑問を表わす発話(492)のあとにJ15に対する個人的な質問が挿入されている。J15の意見の根拠を尋ねる質問である。J15の発話は一貫して丁寧体である。⁽⁷⁾

次に経験がないことを語っている例を示す。

(9) 経験がないこと

683 J15 奈良の、吉野のくずきりっていうのは、ものすごい高いんですけどね。

684 J13 それは、

685 J15 ええ。

→686 J13 もうたぶん一回も、たぶん食べたことない。

687 J15 でも、そんな、普通の人は食べないから、ちょっと残念なく笑い。

688 J14 そうですね。

(9)は吉野のくずきりについて事実を説明している部分である。その中で、J13は684から686にかけて吉野のくずきりは食べたことがないということを語っている。

感想を述べるときに普通体が使われた場合がある。

(10) 感想

446 J15 まあ、水っていうのは確かにそうかもしれませんね。

447 J14 ちょっと、あの、においがきついというか。

448 J15 ええ。

- 449 J 14 たぶんあの、その、奈良の水のせいではなくて、たぶん設備の差のせいだと、
 450 J 15 ああ。
 451 J 14 思うんですけど。
 452 J 15 たしかに。
 →453 J 14 うん、何かあんまり水はおいしくないな。
 454 J 13 ああ、水違いますか、やっぱりそんなに。
 455 J 14 そうですね。

大阪の水と奈良の水は味が違うということを語っている場面である。453でJ 14は終助詞「な」を伴って自分の感想を独話的に述べている。その後の、J 13の水が違うかどうかという質問は丁寧体でなされており、J 14によるその答えも丁寧体で行われている。

冗談を言っているときに普通体が使われた例を示す。

(11) 冗談

- 480 J 15 で、やっぱりさっきちょっと出てきたお寺とか、やっぱりたまにちょっと入りたくなるっていう。
 481 J 13 あ、お寺、お寺。
 →482 J 15 別にまあ、観覧料500円とか取られる<笑い>。
 483 J 13 ああああ。
 484 J 15 うん。
 485 J 15 たまにちょっと行って、ええ雰囲気やなあとか。
 486 J 15 で、また奈良の人ってたぶん、奈良を出てって、出てってから、何か奈良の良さが分かるよこてあるんちゃうかな、
 487 J 14 ああ。
 488 J 14 そうですね。
 489 J 15 と思うんですね。

奈良の良さは自然が残っているという話題の途中にお寺の話が挿入されたところである。482でJ 15は笑いながら観覧料のことを述べている。笑いを伴っていることから、冗談だと判断した。その後、(8)に示したとおり、一回奈良を出てみると奈良の良さがわかるという話が丁寧体で述べられている。

4. 考察

本会話の無標ポライトネスとしての基本状態は丁寧体である。J 13、J 14、J 15のいずれも総発話文の50%以上が丁寧体文で占められている。この言語行動はフォローアップ・インタビューで確認したように、初対面という状況は疎の関係であるということ、したがって丁寧体を使うべきであるという意識を表わしたものである。大学生の初対面会話の待遇レベル⁽⁸⁾を調査した三牧(2002: 63)は、「日本語母語話者の大学生にとっては、社会的に同等の相手との初対面会話では、基本的待遇レベルは普通体・丁寧体のいずれでもよいが、必ず同一のレベルを選択することが社会的規範として共有されている」と述べている。本会話は大学院生によるものであり、中に社会経験を積んでいた者が1名含まれていたが、社会的レベルは同等である。全員が同一の文体を選択しており、三牧の調査結果を支持するものである。

次に文体のシフトについて考察する。基本状態からの逸脱、ここでは丁寧体から普通体にシフ

トすること、がどのような効果をもっているかを考察する。宇佐美（2001）は逸脱した行動を有標ポライトネスとして、プラス・ポライトネス効果、マイナス・ポライトネス効果、言語的談話効果を挙げている。3. 4. で示した聞き手の言語行動と話し手の言語行動を含めた七つの言語行動がどのような効果をもっているのかを考察する。

まず、聞き手の行動であるが、あいづちを打つことは聞き手への共感を誇張する（Brown and Levinson (1987 : 102)）ことになるので、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーである。丁寧体基調の発話のなかで、話題の終結期に打たれた普通体のあいづちのほとんどは独話的に打たれたものである。相手の存在を意識していないことを標示するものであり、言語的談話効果をあげていると考えられる。

次に話し手の言語行動についてである。冗談を言うことは、Brown and Levinson (1987 : 102) においてポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの一つに挙げられていることから、相手のポジティブ・フェイスへの配慮、すなわちプラス・ポライトネス効果がある。

情報の追加、情報の言い換えはいずれも大きな話題の流れからやや外れるものを提示するものである。情報の大きな流れから外れていることを示すために普通体が使われている。言語的談話効果である。個人的な質問も同様である。奈良を一度出ると奈良の良さがわかるという話をしているときに、奈良を出たことがあるのかという個人的な質問をしている。普通体にシフトすることによって、個人的な質問をすることを標示するのである。経験がないことは、それまで客観的な事実を話していたなかに突然発話されたものである。自分の発話が客観的事実から外れることを表したものである。感想を述べることはその最も典型的な例である。事実の説明のなかでふともらした自分の感想は他者を意識するものではなく、独話的に語られたものである。その発話だけが他とは種類の異なるものであることを示している。

このように情報の追加、情報の言い換え、個人的な質問、経験、感想の陳述はそれまでの発話の流れとは異なる種類のものであることを示すために普通体が選択されており、言語的談話効果を生んでいる。

終わりに

討論番組では年齢や社会的地位が異なる人が参加していたので、参加者によって丁寧体と普通体との使用比率に違いが見られた。本初対面会話では参加者全員が初対面では丁寧体を使用すべきだという言語意識をもっていたため、それぞれの総発話文の50%以上が丁寧体によるものであった。このような状況で普通体へのシフトがわずかであるが見られ、ディスコース・ポライトネスという観点からそれらのシフトを分析すると、プラス・ポライトネス効果を生むものと言語的談話効果を生むものがあつた。三牧（2002）が指摘するように、初対面会話でも普通体基調の会話もある。普通体基調の初対面会話における文体シフトの機能については今後の課題としたい。

注

- (1) スピーチ・レベル・シフトという用語も文体シフトと同様の意味で使用する。
- (2) Brown and Levinson (1987) の用語の日本語訳は堀他 (2006) による。
- (3) 本稿でデータとして用いる会話は大学英語教育学会待遇表現研究会の資料である。会話参加者番号は待遇表現研究会で付けられたものである。

- (4) 大塚 (2011) ではあいづちから成る発話をあいづちターン、それ以外のターンを通常ターンと呼び、ターンを単位に分析している。本稿では一つのあいづちターンは1発話文である。
- (5) 大塚 (2011) ではこの種のあいづちを非語彙的あいづちと呼んでいる。
- (6) 文頭の数字はライン番号を示す。発話文番号、発話文終了記号は省略する。
- (7) ライン番号486はライン番号489の引用節である。ライン番号491も「思う」が省略されている引用節である。引用節のなかでは普通体が使われる。これは文法上の制約によるもので、文体とは無関係である。
- (8) 待遇レベルは三牧 (2003) の用語である。

文字化の記号について

- 。 発話文の終わりであることを示す。
- .. 発話文が終了していないことを示す。
- ?。 疑問の発話文であることを示す。
- < > |<| 重ねられた発話であることを示す。
- < > |>| 重ねた発話であることを示す。
- < > 非言語行動であることを示す。
- 語頭の→ 分析の焦点であることを示す。

参考文献

- 上田安希子 (2008) 「意見を述べる談話にみられるあいづちと終助詞」『社会言語科学会第21回大会発表論文集』68-71頁
- 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』第7回国立国語研究所国際シンポジウム第4専門部会報告書、9-58頁 凡人社
- 宇佐美まゆみ (2011) 『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2011年版』
- 宇佐美まゆみ監修 (2012) 「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット (2012年改訂版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究B (課題番号20320072) 研究成果
- 大塚容子 (2004) 「テレビ討論番組における文体切り替えの効果—「ポライトネス」の観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要』第43集、111-124頁
- 大塚容子 (2011) 「初対面の3人会話におけるあいづち—ラポール構築の観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要』第50集、85-95頁
- 堀素子・津田早苗・大塚容子・村田泰美・重光由加・大谷麻美・村田和代 (2006) 『ポライトネスと英語教育 言語使用における対人関係の機能』ひつじ書房
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』第5巻第1号、56-74頁
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. [田中典子監訳 齊藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳 (2011) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社]

